

あとがき

本文にも記したことだが、コートジボワールは1960年の独立から20年近く
にわたって急速な経済成長を実現し、カリスマ的指導者であるウフェ＝ボワ
ニ初代大統領のもとで政治的な安定も続いてきた。この国が長らく、サハラ
以南アフリカには稀な「安定と発展の代名詞」と謳われてきたゆえんはここ
にある。だが、わたしが初めてコートジボワールを訪れた1994年には、ウフ
ェ＝ボワニはすでにその前年に没しており、この世にいなかった。経済状態
もまた1980年代からの景気後退と累積債務の打撃によって大きく傾いたま
まで、物価高や雇用不安などが民生を襲っていた。つまりわたしは、「安定と
発展の代名詞」たる時代が過ぎ去ったあとにこの国の研究を始めたのだった。

これ以後、この国の政治がたどった不安定化の歴史は本書で記したとおり
である。2002年9月に内戦が勃発したとき、わたしはちょうど同地で長期滞
在研究を行っていた。内戦勃発初日には、わたしの住居からほんの1キロ
メートルほどの地点で激しい戦闘が展開された。激しい爆発音を聞きなが
らなすすべなく部屋の奥にじっとしていたあのときの無力感はいまでも忘れる
ことができない。わたしが住んでいた最大都市アビジャンでの戦闘は幸いにも
初日で終息したが、その後も和平の展望が開けないまま日々が過ぎていき、
社会は暗い雰囲気で覆われていくようになった。その息苦しい空気を毎日感
じるうちに、この国の「安定と発展」が完全に喪失されたことをわたしは知
った。むろん、それまで何年ものあいだこの国の情勢を追ってきた者として、
そのことにうすうすは気がついていたのである。だが、この内戦に立ち会う
ことにより、喪失が紛れもないもので、かつきわめて深刻であることを思い
知ったのである。

なぜこのようなことになったのか。なぜ「安定と発展」を誇ったこの国が、
坂道を転げ落ちるように深刻な不安定化に陥っていったのか。この問いを自
分なりに探究したのが本書である。考察では必然的に植民地化以前に遡る歴

史的射程が求められることとなり、できあがった本書はコートジボワール通史としての性格をもつものとなった。この国がたどった歴史を日本語で発表できたことに、この国の専門家を名乗ってきた研究者として一定の務めを果たせたものと思いたい。また、コートジボワールというひとつの国を舞台に展開された出来事は、たんにその国にしかかわりをもたないものではなく、同時代の世界がたどってきた歴史についてのなんらかの知見や洞察を提示するに違いないということも、本書をとおして探求したことのひとつであった。このねらいがどの程度実現したのかは心許ないが、一国の徹底的な検討をとおして一国にとどまらない視座を獲得するという、地域研究が実現しうる可能性にとりくんだ試みとして読まれることを願うばかりである。

本書は、1993年4月にアジア経済研究所に研究員として採用されて以来、20年あまりにわたって書き継いできた論考を集大成したものである。既発表論考との関係は序論の注21に詳しく記した。経緯としては、まず博士論文としてまとめられ、2009年3月に一橋大学大学院社会学研究科から学位授与を受けた。ついで2013年度にアジア経済研究所にて個人研究を実施することが認められ、その機会を利用して博士論文に大幅な加筆修正を施し、本書ができあがった。

本書のこのような成り立ちに深くかかわる2人の方にここで御礼を申し上げたい。おひとはアジア経済研究所のコートジボワール研究の大先達である原口武彦さんである。原口さんとの出会いがなければ、わたしがコートジボワールの研究に携わることはおそらくなかった。文章を書くことの厳しさを教えてくださったのも原口さんだった。そのほか原口さんにお世話になったことを挙げていくと本当にきりが無いのだが、本書を御礼のしるしとして捧げることをどうぞお許しください。もうお一方は、東京外国語大学での修士課程と、それから20年あまりあいだをあけての一橋大学での博士後期課程でご指導をいただいた伊豫谷登士翁先生である。先生からは、アフリカの研究をとおして世界がみえてくるような研究をするようにとの趣旨で、「世界をみる方法としてのアフリカ」という執筆のキーワードをいただいた。本書

がこのキーワードに照らしてわずかながらでも成功を収めていることを祈りつつ、先生のご指導に改めて御礼を申し上げます。

思いおこすと、修士課程を修了してアジア経済研究所に入所したとき、わたしはそれまで1度も海外に行ったことがなかった。それから20年あまりを経るあいだに、わたしはアフリカという自分にとってまったく未知だった大陸を訪れることを仕事とするようになり、内戦が勃発して「失敗国家」と称されもするような国で何年か生活することにもなった。修士までの学生時代には想像もしなかった生活を送ってきたことにつくづく不思議な感覚を覚える。このようななりゆき任せの人生を見守ってくれた両親と妻に、感謝をこめて本書を捧げます。

2015年1月 著者

